

ルカによる福音書5章 「罪の赦しの福音宣教」

1A 罪深い者の召し 1-11

1B 御言葉の宣教 1-3

2B 大漁に見える御言葉の力 4-11

2A 罪の赦しの証し 12-26

1B らい病の清め 12-16

2B 中風の癒し 17-26

3A 罪人との交わり 27-39

1B 取税人に対する招き 27-28

2B 罪人との食事 29-32

3B 新しいぶどう酒 33-38

本文

ルカによる福音書5章を開いてください。イエス様が、ヨルダン川でバプテスマを受けられてから、悪魔からの試みを受けられた後にガリラヤで、神の国の福音を宣べ伝え始めたところを読み始めました。5章はその続きです。主がナザレの会堂で、イザヤ書にある言葉が実現したと言われましたが、「捕らわれ人には解放を」とありました。ここを以前の版の新改訳では「赦免を」と訳していました。人々が罪から来る、あらゆる側面から罪の赦しによって解放され、元来の神の形に解放されていく姿が、5章で分かってきます。また、イエス様がご自分についてくるように、弟子たちを召し出していかれる様子も見てきます。

1A 罪深い者の召し 1-11

1B 御言葉の宣教 1-3

1 さて、群衆が神のことばを聞こうとしてイエスに押し迫って来たとき、イエスはゲネサレ湖の岸辺に立って、2 岸辺に小舟が二艘あるのをご覧になった。漁師たちは舟から降りて網を洗っていた。3 イエスはそのうちの一つ、シモンの舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして腰を下ろし、舟から群衆を教え始められた。

イエス様は、ガリラヤの諸会堂で何を行われていたかと言いますと、まず、教えておられました。そして、その教えている言葉に力や権威があることを示されました。悪霊を人から追い出されましたが、群衆は、「4:36 このことばは何なのだろうか。権威と力をもって命じられると、汚れた霊が出て行くとは。」と言ったのです。神の国の福音とは、キリストの言葉にある権威と力で、これまで自分を縛っていたものから解放されるという世界です。確かに神は、私を生かし、私を罪の縄目から解放された。この方に従い、この方にひれ伏し、従うのだ、という世界です。そこで、群衆は「神の

ことばを聞こうとしてイエスに押し迫って来た」とあります。奇跡や徴ではなく、神のことばを聞こうとして押し迫ってきたのです。

そして場所は、「ゲネサレ湖の岸辺」とあります。ガリラヤ湖のことですが、北東に広がる岸辺員沿った平野をゲネサレと言います。その東にはカペナウムがあります。そこでイエス様は、会堂では悪霊を追い出しておられ、またペテロの姑の熱病を癒し、数々の病を癒しておられました。今、群衆が、押し迫って来るので、イエス様は彼らから少し距離をとって全体を見渡して語れるように、シモン、つまりペテロに舟を漕ぎだすようにお頼みになっています。一艘はペテロのもの、もう一艘はヨハネとヤコブのもので、彼らは夜通し、網を降ろして、網を既に洗っている最中でした。けれども、イエス様は舟を漕ぎだすようにペテロに頼みます。すでに、ペテロはイエス様とはラビと弟子との関係に入っていました。そして数々の癒しも見ていたに違いありません。しかし、彼はいつものように仕事もしていました。まだ、本当の意味でイエス様を主としていません。

そして、イエス様はいつものように「腰を下ろ」して、教え始めておられます。イエス様は神のことばを教え、これまでその言葉の力と権威をお示しになりました。主は、これからペテロに対して個人的に示されます。

2B 大漁に見える御言葉の力 4-11

4 話が終わるとシモンに言われた。「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい。」⁵すると、シモンが答えた。「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですので、網を下ろしてみましよう。」

ここのペテロの、「でも、おことばですので、網を下ろしてみましよう。」という言葉が好きです。何一つ捕れなかったと言った後で、どのように逡巡したのかな？と思います。何秒か、沈黙が続いたかもしれませんね。半信半疑であったと思います。けれども、それで自分の師であるイエス様が言われているのだから、それでやってみよう、と思ったのです。ここで励ましになるのは、私たちがどんなに疑問があっても、そのような中途半端な決断であっても、それでも主はその決断を喜ばれるということです。ペテロは、心は十分に付いて来なくとも、それでも行なうべき決断をしたのです。私たちは、心が全く整えられてから、整理されてからと思いますが、実際の信仰の歩みはもっと生き活きとしています。前進していて、絶えず水のように動いています。十分に整えられていなくとも、大事なのは、主の言われていることに従ってみるという試みなのです。

6 そして、そのとおりにすると、おびたしい数の魚が入り、網が破れそうになった。⁷そこで別の舟にいた仲間の者たちに、助けに来てくれるよう合図した。彼らがやって来て、魚を二艘の舟いっぱい引き上げたところ、両方とも沈みそうになった。

ここに主のユーモアがあるような気がします。ペテロに対して、主は彼の仕事の中で、ご自分の偉大な力をお見せになりました。ご自分の言葉にある、力を権威をお見せになりました。舟が沈みそうになるぐらいの魚です。けれども、本当に沈むわけではありません。イエス様としては、良い加減の量の魚を取らせたのではないのでしょうか。さらに、ヨハネとヤコブの舟の応援を頼ませることも想定済みだったことでしょうか。ここで、ペテロだけでなく、ヤコブとヨハネも共に弟子として召し出そうとしておられるのだと思います。人が回心する時に、自分ひとりだけでなく、自分の仲間も共に救われることがありますね。例えば私の両親は母が信仰を持った後に、一か月もしないで父が信じ、同日にバプテスマを受けました。主は、複数の人を同時に呼び出されることもあります。

8 これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して言った。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」9 彼も、一緒にいた者たちもみな、自分たちが捕った魚のことで驚いたのであった。10 シモンの仲間の、ゼバダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。」

ここでルカは、ペテロのことを「シモン・ペテロ」と呼んでいます。元々はシモンという名前です、これがヘブル語のユダヤ人の名前です。それからペテロですが、イエス様がピリポ・カイサリアにおられて、ペテロがそこで、イエスが生ける神の御子キリストだと告白した時、この新しい名を与えられました。「石」という意味です。石といっても、そこら辺に転がっている普通の小石のことです。けれども、ペトラ、この崖のような大岩の上に私の教会を建てると言われたのです。ペテロを見る時に、私たちはいかに自分たちもちっぽけな存在だなと思わないのでしょうか。彼が、神の国の福音を伝える使徒として、その指導的働きを務める時に、彼自身は私たちと何も変わらない小さな存在なのだということです。

そして、ペテロは、「ひれ伏して」いますね。これまでは教師と弟子の関係でした。だから、普通に付き合っていた感じがあります。けれどもここで、ペテロは恐ろしさを感じました。ここは、「主よ、私から離れてください。」と訳されていますが、そんなカッコいい者ではありません、「私から離れてください、おお、主よ！」と、後に主よ！と付いているのです。これだけ、この懇願が必死だったのです。これまで、自信のあった自分の漁師としての生活が、丸裸にされ、イエスがすべての主であることを告白したのです。そして、ヤコブとヨハネも同じでした。この三人が後に、イエス様がヤイロの娘をよみがえらせる場に立ち合わせ、高い山で変貌する時、それからゲツセマネの園で近くに引き寄せた三人になります。

つまり、三人は主の圧倒的な偉大な力を目撃している者たちであり、彼らはあくまでも目撃者であり、その驚くべき恵みを証言している者たちに過ぎません。その彼らが私たちに模範となっています。私たちも、自分たちは全く小さき者であり、けれどもイエス様の恵みにある驚くべき御業を証ししていく者たちだということです。そして主はペテロに言われました、「恐れることはない。今から

後、あなたは人間を捕るようになるのです。」主の圧倒的な力の中で、その恵みの中で、主を恐れかしくみつづき宣教の働きを行います。今度は魚ではないのです、人々の魂です。その魂がキリストの身元に行くように導くことが務めになります。大きな、大きな働きです。その恵みに圧倒されながら、私たちも生きています。

11 彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った。

これまでは、イエス様を単なるラビとして付き合っていた仲から、全てを捨ててこの方を主としてついて行くことに決めました。ギリシア語では、捨てるという言葉も、従うという言葉も、一回限り行ったという意味合いで書かれており(アオリスト時制)、もうそのように決めてしまうのです。私が、結婚する夫婦のカウンセリングをする時に、「これは信仰の次に大きな決断ですね」と話します。言い換えると、結婚のことを思えば、信仰による決断がどういうものか分かるでしょう。一度決めたら、後で迷うものでは、絶対はないということです。もちろん、そういった思いがよぎることはあるでしょう。結婚でもあるでしょう、しかし、「この人で良かったのか・・・」などと迷いながら結婚生活をすることはありません。ましてや、主にお従いするということも、一度決めたら戻らないという決断です。

2A 罪の赦しの証し 12-26

そして次に、二つの病の癒しの出来事をルカは記しています。一つは、ツアラアト、すなわちらい病の清めであり、もう一つは中風の癒しです。病の癒しでありながら、そこと、罪の赦しと清めという真理が語られています。

1B らい病の清め 12-16

12 さて、イエスがある町におられたとき、見よ、全身ツアラアトに冒された人がいた。その人はイエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります。」

13 イエスは手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐにツアラアトが消えた。14 イエスは彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのため、モーセが命じたように、あなたのきよめのささげ物をしなさい。」

らい病については、私たちが知らなければいけないのは、旧約聖書の中における律法であります。レビ記 13-14 章に書いてあります。らい病と言っても、必ずしもハンセン氏病とは限らず、様々な重い皮膚病、もしくは家におけるカビも含まれます。それでツアラアトというヘブル語をそのまま使っても良いのかもしれませんが、いずれにしても、そこでは「レビ 10:10 汚れのものときよいものを分け」る、とあります。そして、食物規定が 11 章にあり、女の月のさわりや出産時の出血を、不浄の期間を呼ぶなど、単なる衛生上のことではなく、儀式的に、象徴的に清い、汚れているというもののみなしておられます。レビ記の学びの時に詳しく学びましたが、それはそれぞれ、私たちと

神との関係において、罪の汚れがどのようなものなのか、そしてそこから清められるとはどうすればよいのかを教える、教材になっています。

13章には、らい病が潜行するものと学びました。潜行とは、潜水に使う「潜る」、行は進行することです。潜って進行することです。ある時に症状を出しますが、すぐに体内に潜って症状をしばらく見せません。それで大丈夫かなと思っていたら、次に症状が出て来る時には、もう手遅れのような性質のもので、これが、罪の汚れに似ているのです。人の心に抱かれた悪い思いは、その心の中で隠されて、だんだんその人を汚していき、そして表出した時は取り返しがつかなくなります。それで、祭司がその人を七日間隔離させて、症状が進行しているかどうか、七日目に調べるのです。進行していたららい病と宣言し、宣言された人は、誰かが自分に近づいたら、「汚れている。汚れている！」と叫ばなければいけません。

ところが非常に興味深いことに、全身にらい病が広がっていれば、清いと宣言されるのです。「13:13 祭司がそれを調べる。もし、そのツアラアトがその人のからだ全体をおおっているなら、祭司はその患者をきよいと宣言する。すべてが白く変わったので、彼はきよい。」ですから、これは病の症状のことを言っているのではなく、やはり、象徴的、霊的な意味合いのある、清い、汚れなのです。なぜ全身に回っているのに清いのか？体の色がまだらではなく、一色になっているから、ということがあるでしょう。混じり合っていないという意味合いがあるかもしれません。そして霊的には、全身が汚れていると知ったなら、その時に神の恵みによって救いがあるということです。パウロは、ローマ人への手紙で、人が如何に墮落しているのかを教えました。自分たちに良いものは何もないことを論証して、それで初めて、信仰による、恵みによる救いを教えています(3章)。

そこでここで、「全身ツアラアトに冒された人」がいるのです。彼は清いと宣言してもらってよい存在です。そして、象徴的にだけでなく、実質、本当にらい病からの癒しをしていただくために、イエス様のところに近づいています。私たちは、自分が何か外側の悪い行いをした、とかで、罪人であるかどうかを実感するのではなく、自分の存在そのものが罪まみれというか、それだけ深い罪意識を持つことによって、初めて、イエス様のところで全身を霊的に洗っていただけるのです。

そして、彼の信仰告白がとても教えられます。「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります。」ということです。彼はイエスさまを、「主よ」と言って、憚りませんでした。もう既にイエス様を自分の主として受け入れていたのです。そして、「お心一つ」でと言っています。彼は、イエスが自分を清めることができると確信を持っていました。癒すことができるのかできないのかは、ここでの彼の疑いはありません。けれども、お心一つで、ということで、この方の主権を認めているのです。多くの人が、クリスチャンになったという人たちも、神は全能なのに、何でもできるのに、どうしてこのことを行ったださらなかったのか？と嘆き、訴えます。けれども、もしこの方が主権者であることを知るならば、私たちは静まって、「みこころならば」というはずで、主がご自分の望まれ

ることをことごとく行われる方なのだということを認めるのです。

そして、すぐに清められます。それから、イエス様はこれを祭司に見せなさいと強く指示されます。レビ記 14 章に、らい病人が清められた時に行うべき儀式が詳しく書かれています。それは、とても美しい恵みが書かれていて、その儀式一つ一つにキリストが十字架で血を流されて死に、甦られたことを指し示している儀式があるし、いけにえの血を右の耳たぶ、手、足のつま先に付けるで あるとか、まるで祭司が主への奉仕を務める時の任命式であるかのような儀式があります。ここから、らい病人に対する神の恵みがあります。単に清められるだけでなく、主に完全にお仕えでき るほどの回復を与えられるということです。

そしてイエス様はしっかりと、祭司たちに見せなさいと命じておられるのです。ここで重要なこと があります。レビ記におけるらい病人の規定では、清められた後の儀式はあっても、そこに神が清 めてくださるという約束は書かれていないのです。神のご介入なしには、らい病人は清められない のです。律法はあっても、神の恵みとまことがそこには十分に表れていません。そこで、ヨハネ 1 章はこう書いています。「1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストに よって実現したからである。」神が律法の中で示しておられた清めは、イエス様の恵みと真実によ って実現するのです。そのことによって、祭司たちがその実際の行いを見て、確かにイエスは律法 を成就される方であることを知ることができます。ところが、話は少しずつ伝わってきました。

15 しかし、イエスのうわさはますます広まり、大勢の群衆が話を聞くために、また病気を癒やして もらうために集まって来た。16 だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた。

清められたらい病人は、言いふらしていききました。そこで、イエス様は本来の、恵みとまことを実 現させるという使命からずれて、ただ病人を直す人であるかのように伝わってしまいました。これが当時のメシア信仰と合わされば、それこそローマを脅かしかねない反体制勢力に見られて しまうかもしれません。私たちは、いかにイエス様の証しを立てているかを気を付けないといけま せんね。証しをしているつもりが、主が願っておられるかたち、つまり良い行いによって、「この人 は確かに何かを持っている。それがクリスチャンと言うのか？」と自ずと分かるのではなく、何か違 うことをすることによって、「この人たち、何をやっているんだろうね？」と疑われてしまうことをして しまいます。

イエス様は、霊的な戦略を建て直さないといけなくなったのでしょう。再び、寂しい所に退いて祈ら れています。私たちに絶えず必要です。何が必要か？と言えば、退いて祈ることです。大勢のとこ ろでは、どこかで焦点がずれていきます。人々の群集心理や同調圧力などで、伝えたいメッセー ジが、焦点がずれて伝わって行きます。主を本当の意味で証しで来ているか？ということです。

2B 中風の癒し 17-26

17 ある日のこと、イエスが教えておられると、パリサイ人たちと律法の教師たちが、そこに座っていた。彼らはガリラヤとユダヤのすべての村やエルサレムから来ていた。イエスは主の御力によって、病気を治しておられた。

パリサイ人や律法学者らが来ています。彼らは、ガリラヤだけでなく、ユダヤ地方、そしてエルサレムからも来ています。そう、イエス様が行われたかった静かで、けれども力強い証しから外れて、大きな動きになってしまい、それで人々の目に付くようになってこれらの人々にも伝わったのです。彼らは、新しい動きが出れば、それが神からのものかどうかを調べます。調べるためにやって来ていたのです。

18 すると見よ。男たちが、中風をわずらっている人を床に載せて運んで来た。そして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとした。19 しかし、大勢の人のために病人を運び込む方法が見つからなかったので、屋上に上って瓦をはがし、そこから彼の寝床を、人々の真ん中、イエスの前につり降ろした。

イエス様が主の力によって、人々の病を治しておられたので、それでこの男たちが中風を患っている人を床に載せて運んできました。中風は、体が麻痺してしまうので自分で動くことはできません。しかし、イエス様が病人を治すという噂を聞きつけました。彼らの行動力は凄まじいものです。イエス様がおられた家には大勢の人が来ていたので、中に入ることができませんでした。そこで、とんでもないことを思いつきました。その地域の家屋は、屋上は平らになっていて、様々な活動を屋上でします。ナザレに行った時に、当時の建物の様子の再現がありましたが、泥や藁を混ぜたもの、そして材木の梁です。ですから、叩き壊すことはできます。そして、四隅に紐をつけたのでしょいか、釣り降ろします。そしてイエス様の前に釣り降ろしました。

ここに、彼らの信仰があります。らい病の人もそうでしたが、とても行動的です。常軌を逸しています。らい病の人は、人から離れなければいけないのに、むしろイエス様に近づきましたね。ここでも、人の家の屋根を壊してしまうのですよ！しかし、信仰というのは行いの中に見出せるものです。そして、イエス様の言われた言葉に見出せるものです。「マタ 7:7 求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」

20 イエスは彼らの信仰を見て、「友よ、あなたの罪は赦された」と言われた。

今、言ったとおりですね、どうやってイエス様は彼らの信仰を見られたのでしょうか。屋根を剥がして、釣り降ろすその行動によって彼らの信仰をご覧になったのです。

そして、その信仰にイエス様は応答されて、「友よ、あなたの罪は赦された」と言われました。あれっ？この男たちは、「中風を治すために来たのに、どうして罪の赦しなの？ちょっと違います！」と言いたかったことでしょう。けれども、ここに人にとっての優先事項があるのです。病が治ることと、罪が赦されることは、どちらが優先されなければいけないのか？ということです。病のままでも罪が赦されているということと、病が治っても罪が赦されていないということでは、どちらが幸いでしょうか？前者ですね。私たちは数多くの、病床で信仰を持ち、罪赦された確信を得て、心を平安にしている人々を大勢知っています。キリスト教は、病の中にいる人々の大勢の証し人で満ちています。けれども、病、あるいは問題と言い直してもよいでしょうか、自分を苦しめているものから解放されても、神ではなく、自分で生きているのだという誇り高ぶりの中で生きていけば、そこには真実な幸いはありません。そして罪の中に留まっていれば、永遠の滅びに定められてしまいます。

イエス様は、優先順位を守られたのです。私たちも、優先順位を守りたいです。苦しみから解放されることよりも、今、苦しみが残っていたとしてもそれでも、罪から解放された神との交わりが確保されていることを喜んでいるのでしょうか？

21 ところが、律法学者たち、パリサイ人たちはあれこれ考え始めた。「神への冒瀆を口にするこの人は、いったい何者だ。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」

律法学者たちが言っているのはそのとおりです。罪の赦しというのは、神でなければできないことだからです。人は罪を赦す、と言っても、究極的には神に赦されなければ本当には許されていません。神こそが、すべてを支配されている裁き主ですから。ですから、イエスが行われたのはまさしく、「わたしは神である」ことを意味しています。

22 イエスは彼らがあれこれ考えているのを見抜いて言われた。「あなたがたは心の中で何を考えているのか。23 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。24 しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために――。」そう言って、中風の人に言われた。「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」

イエス様は、人々の心にあるものを全て知っておられます。あれこれ考えていたのをご存じでした。これから、パリサイ人と律法学者があれこれ考えているところから、口に出してどうしようかと話し合い、そしてずっと後にはいかに殺すべきかと殺害を企むようになります。

そしてイエス様の質問に対して、どう答えたらよいですか？『『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。』ですが、どちらですか？…罪は赦された、ですね。これは目に見えないことですから、口で言っただけならなくとも、ごまかすことができます。けれども、

起きて歩け、というのは、そうならなかったら、イエス様の言葉には権威がない、力がないことが証明されます。けれども、罪を赦すという、神にしかできない権威がご自分にあるのだということを示すために、敢えて目に見える、中風の癒しを行われるのです。

25 すると彼はすぐに人々の前で立ち上がり、寝ていた床を担ぎ、神をあがめながら自分の家に帰って行った。26 人々はみな非常に驚き、神をあがめた。また、恐れに満たされて言った。「私たちは今日、驚くべきことを見た。」

「すぐに」という言葉をルカは使っています。らい病も治った時に「すぐに」という言葉がありました。イエス様の働きは、自然的な治癒ではなく、超自然的なものでした。そして、治った本人も、また周りの人たちも、神をあがめています。そう、主が働かれる時に、もうこれは神にしかできないのだと驚いて、神をほめたたえるのです。これは、誰々さんが行なった凄いことだね、ということではなく、神をあがめているのです。そして人々の驚き方は、正気を失うような驚きです。気が動転するような驚きです。

イエス様はある時には隠れるようにして御業をお見せになりますが、ここでは、はっきりとユダヤ教指導者たちの前で、ご自分にある神の権威と力をお見せなって、反論をやめさせたのです。そして人々一般には、単に病人を治す人ではなく、それよりもはるかに優れた存在であることをお見せになったのです。はっきりと不思議を行った方として、彼らの心に残すためであります。

3A 罪人との交わり 27-39

1B 取税人に対する招き 27-28

27 その後、イエスは出て行き、収税所に座っているレビという取税人に目を留められた。そして「わたしについて来なさい」と言われた。28 するとレビは、すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った。

再び弟子を召し出す働きを行われます。イエス様は、おそらくカペナウムにおられました。というのは、収税所はカペナウムにあったからです。ここには、ヴィア・マリスと呼ばれる海沿いの道、エジプトからダマスコに向かう国際幹線道路が走っていました。そこで通行税を徴収していたのです。取税人は、ユダヤ人たちから憎まれていました。ローマの代理人として、税や罰金を徴収するのですが、民から集めた額は大目に徴収し、ローマに納める額との差額で生きていましたが、それで多くの金を得ることができました。つまりユダヤ人にとっては二重の罪です。一つは、彼らを抑圧しているローマに加担しているということ、もう一つは、同胞から金を盗んでいたということです。そのために、取税人との交わりはユダヤ教の指導者はしてはいけないと禁じていました。

レビ、すなわちマタイにイエス様は目を留められました。これは、単に注意を向けたというよりも、

注意深く見たということです。ここに大きな恵みがあります。イエス様は誰からも憎まれ、交わること禁じられている人に対して大きな関心を持っておられたのです。

そして取税人は、単にそこでお金を数えているだけではありません。その地域のあらゆる情報が交差するところにいます。当然、イエス様のことも聞いています。ですから、ただ目を向けてそれで何も知らないで立ち上がったわけではありません。それで、レビが、ペテロやヨハネ、ヤコブと同じように、「すべてを捨てて立ち上が」っています。ここには大きな決断が必要です。一度、取税人をやめれば、ペテロの漁業とは違って、副業はできないそうです。取税人には戻れないのです。けれども、彼は決意しました。それだけの恵みがあったのです。先の、中風の人を立ち直らせた噂が早速入っていたのかもしれませんが、この方こそが、私が従うべき主なのだと知ったのでしょう。

2B 罪人との食事 29-32

29 それからレビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。取税人たちやほかの人たちが大勢、ともに食卓に着いていた。

後にザアカイも、神の救いを受けてイエス様を食事に招きました。云わば、霊的な救いの誕生会をしているようなものです。そしてレビ(マタイ)は、取税人ですので、ユダヤ人の間で嫌われていたので、取税人同士の食事しかしません。そういったところには、決して他のユダヤ人は入りません。けれども、イエスさまを中心にしたもてなしをしたのです。イエス様がその中に入りました。ところで、この「食卓に着く」というのは、テーブルと椅子があって食卓に着くのではないです、低いテーブルに、肘をついて横たわって食べる様子です。ですから、もっと親密で、一体感のある食べ方をしています。

30 すると、パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって小声で文句を言った。「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか。」³¹ そこでイエスは彼らに答えられた。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」

パリサイ派の人たちと、律法学者の中では、悪者と食事をするということは、その悪者たちと一つになることを意味すると考えていました。詩篇 1 篇 1 節に、悪者の座に着かない人が幸いであると書いてありますね。ですから、彼らにとってはイエス様が不法な事をしているとみなしていたのです。「罪人」とあるのは、遊女とか、律法の蚊帳の外に置かれているような人たちです。律法を守ることさえ期待されていない、部外者であり、見捨てられている人々です。

それで、小声で文句を言っています。先は心の中でいろいろ考えていましたが、ここでは既に声をあげています。しかも、イエス様本人ではありません、弟子に対してであります。まだ、その反対

の声は消極的なんですね。けれども、これがエスカレートしていく姿を後々に見ていきます。

イエス様は、決して不法なことをしておられません。悪者の座に着くのは、自分自身がその悪と交わることを意味しますが、イエス様の場合はその反対です。ご自身の聖さが他の人々に悔い改めを導くこととなります。「罪人を招いて悔い改めさせるため」と言われます。これこそが、神の御心です。神は罪人である者たちのところまで行き、そして彼らが悪から立ち返って、ご自分のところに帰るのを待っておられます。人となられたイエス様は、食事をするという究極のところまで降りて来てくださったのです。私たちの真ん中にイエス様がおられるとしたら、私たちも、自分にある病、罪、そのありのままの姿を持っていくということです。ありのままの姿で行くことです。そして、そのイエス様の慈しみに触れ、悔い改めに導かれます。

3B 新しいぶどう酒 33-38

33 また彼らはイエスに言った。「ヨハネの弟子たちはよく断食をし、祈りをしています。パリサイ人の弟子たちも同じです。ところが、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています。」

この食事の時に、今度は違う批判をしました。今度は弟子たちに対してではなく、直接、イエス様に対してしておられます。ここでのポイントは、ヨハネの弟子たちが断食をしているのに、ということです。ヨハネは、イエス様を宣べ伝えていた人です。なのに、彼らの弟子は断食をして、祈っているのに、あなた方の弟子はどうなのですか？と尋ねています。ここでの断食は、罪を悔い改めて嘆き悲しんでいるそれであります。それを行っていませんね、ということです。

しかし、この習慣は聖書には書かれていない事です。律法には、贖罪日という大祭司が、至聖所に入って罪の贖いをする日に身を戒めるとレビ記 23 章に書いてありますが、それ以外は明記されていません。けれども、バビロンから帰還したユダの民は、頻繁に断食をする習慣を始めました。イエス様の時代には、週に 2 度も行っていました。しかし、パリサイ派の人たちと同じ過ちを私たちは犯します。よく考えれば、聖書には書かれていないことを人々に課しています。彼らは、ヨハネにしても、パリサイ人にしても、弟子たちですね。彼らが、聖書には殊更に書かれていないことを行っていたのです。ヨハネは自発的に行なっていたのですが、弟子たちはそれを規則化していたのです。パリサイ派は、それを教えとして弟子たちに伝授していたのです。いずれにしても、聖書には書かれていないことを行わせていました。しかし、罪の赦しに基づく人々の解放、そして神をあげ、神を喜び、神に従うという福音には、そういった従来のやり方をぶち壊すこともあります。

34 イエスは彼らに言われた。「花婿と一緒にいるのに、花婿に付き添う友人たちに断食させることが、あなたがたにできますか。35 しかし、やがて時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」

これは、イエス様が花婿で、弟子たちが花嫁のことです。今、約束のメシアが来られました。その弟子たちがいて、罪人が悔い改めているのを喜んでいるのです。けれども、花嫁が取り去られる日というのは、十字架のことです。そこでは弟子たちは悲しみます。

36 イエスはまた一つのたとえを彼らに話された。「だれも、新しい衣から布切れを引き裂いて、古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんなことをすれば、その新しい衣を裂くことになり、新しい衣から取った布切れも古い衣には合いません。37 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を裂き、ぶどう酒が流れ出て、皮袋もだめになります。38 新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れなければなりません。39 まただれも、古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。『古い物が良い』と言います。」

新しい布切れは洗うと縮むので、古い着物に継ぎをすれば古い着物が破れてしまいます。そして、新しいぶどう酒は、酸化します。新しい皮袋は伸縮性があるので大丈夫ですが、古い皮袋は固くなっているの、新しいぶどう酒を入れると破れてしまいます。この2つのたとえから分かることは、古いものを捨てなければ、新しい働きを受け入れることはできないことです。イエスは、貧しい者に福音を宣べ伝えられました。貧しい人とは、古い自分に死んだ人のことです。ペテロのように、らい病人のように、そしてここにいるマタイのように、今までの自分の生き方や、自分のあり方に限界を認めている人です。だから、新しい働きが起こったときに、古い人を脱ぎ捨てて、キリストにある新しい人を身に着けることができるのです。古いものを持ったままで、新しい働きを受け入れることはできません。

しかし、イエス様が言われているように、パリサイ人、律法学者は、古い物のほうが良いと考えていました。これが、私たちに対する挑戦です。主は、新しいことを行われようとしています。必ず、主は罪人を救われます。悔い改めに導かれます。しかし、私たちが今までの快適さ、今までの習慣、そういったもので批評したり、批判したりしているのであれば、必ずその働きはつぶれます。どちらにとっても悪いことになるのです。それゆえ、私たちも日々変えられないといけないのです。問題は、外にいる人々、罪人がなかなか悔い改めないことではないです。私たちが、今までと同じようにしようとして、悔い改めへと導かれるイエス様の働きを阻んでしまうことなのです。恵みにおいて成長しましょう。恵みにおいて成長することによって、人々を受け入れ、積極的に新しい働きの中に自分を関わらせようとしていきます。